# 広告

# いしかり産【番外編】

今回は、16年にもわたって続くある一つの国際交流をご紹介します。

▶鎮魂・平和友好の碑
1996（平成8）年、姉妹都市提携から3年を経てワニノ市内に完成した、シベリア抑留者の霊を慰める「鎮魂・平和友好の碑」。写真はその除幕式の様子（写真中央に越澤さん）。なお慰霊碑は、同市にある日本文化センターの会員の皆さんによって清掃や修繕が行われています。同碑は、平和を切望する両国民の象徴といえるでしょう。

◀最近まで石狩国際交流協会の理事を務めていた越澤幸三さん

▶ワニノ市日本文化協会（日本文化センター）のナタリヤ・ソボレバ会長

▶1993（平成5）年に発見された公文書「決定第219号」からは、ワニノ市管内に日本人墓地が10カ所あること、そのすべてが写真のバム鉄道沿線に点在することが判明しました。

## 墓標を探して
### ――ワニノと石狩を往復した手紙

花川北に住む越澤幸三さん（96）とワニノ市に暮らすナタリヤ・ソボレバさん（51）が手紙のやりとりを始めたのは16年前。越澤さんがナタリヤさんに、日本人墓地の調査を依頼したのがきっかけでした。

すべては、1991（平成3）年にゴルバチョフ大統領が来日して公表した名簿に端を発します。名簿は、4万人に及ぶシベリア抑留死亡者を記したもので、そのニュースは越澤さんの心を大きく動かしました。

越澤さん自身、23歳のときに召集され、従軍先の中国東北部では仲間を埋葬したこともあります。極寒の地で、飢えと重労働に苦しみながら、ついには故郷に戻ることのなかった人々―。そんな彼らの霊を慰めたいと、越澤さんは資料を取り寄せ、独自に調査しました。結果、ワニノ市管内に墓地が6カ所あることまでは確認できましたが、肝心の場所が分かりません。そこで1992（平成4）年に初めてワニノ市を訪れたとき、ガイド役のナタリヤさんにも、墓地調査への協力を訴えたのです。

ナタリヤさんは、ワニノ市日本文化協会の会長。ナタリヤさんは越澤さんが帰国すると、遠くハバロフスク市の内務省所管古文書庫まで足を運び、貴重な資料を見つけては越澤さんに送り続けました。その献身的な協力に、あるとき越澤さんはナタリヤさんへ心ばかりの謝金を送ります。しかし、ナタリヤさんは「戦争が終わっても祖国へ帰れなかったすべての人たちに対し、私たちは償う義務があるので」と丁重に断り、自分の家族の中にも同じように戦地から戻らず、墓の場所すら分からない人たちがいることを打ち明けました。

「ナタリヤとの出会いは私にとって大きな財産」と越澤さん。ワニノ市内における墓地の所在が明らかになった今も、ナタリヤさんとの手紙のやりとりは続きます。そこには互いの誕生日を祝い、健康を祈る言葉がありました。

今年は石狩市とワニノ市が姉妹都市の提携を結んで15年。7月には石狩市からワニノ市へ向け訪問団が出発します。残念ながら越澤さんはそれには参加できませんが、「9月にはワニノ市からも訪問団が来る。ナタリヤとも再会できるので、今から本当に楽しみ」と笑顔がこぼれました。

◎石狩随想 22

## 釣談議

「鮭（さけ）」をまちの始まりとする石狩市と「キングサーモン」のメッカ、キャンベルリバー市との姉妹都市交流25周年。ワニノ市も15周年を迎える。◆3市の釣り人がそれぞれの川でサーモン釣りをしたとする。アイザック・ウォルトンなら釣りながら、精神の根底に思考を張り巡らすことにでもなろうが、私自身は両手を縛らないと釣魚は限りなく大きくなる方。キャンベルリバー市の友人はもはや修行僧のようにひたすらその瞬間を待ち続ける。ワニノ市は釣り飽きたとでも言うのだろうか。◆釣りは楽しみでやるべきもので、余裕無き魚獲りになってはいけない。都市交流も似ている。成果を求めるのではなく、歩み続けることこそ意義がある。すでに86人の留学生や57人のヤングアンバサダーが大使の役を果してきた。◆子どもたちの小さな自信の積み重ねこそ何にもかえがたい。〈釣れなくても結構〉の心境こそ、大魚に巡り合える最善手であることを知識としては知っているが、これが実に難しい。このたびの両市への訪問、まずは今日まで続き得たことを称（たた）え合い、これからの永遠なる歩みを確認するものとなる。夜を徹しての釣談議は大魚を夢見るひとりの人としても至福の時でありたいと願う。（市長）